

## 2023 年度 卒業生答辞 八木 つきの

春風にのってほのかに花の香りが漂い、やわらかな日差しに心躍る季節となりました。

本日、私たちは神奈川大学を卒業いたします。

学生生活を締めくくる門出の日に、このような素晴らしい式を設けてくださり、心より感謝申し上げます。また、ご多忙の中ご列席いただきました先生方やご来賓の皆様、卒業生を代表し厚く御礼申し上げます。

2020 年 4 月に入学した私たちにとって、大学生生活のほとんどは感染症と隣り合わせの日々でした。人と距離を取ることが新しい生活様式となった時代において、入学前に思い描いていたものとは異なる授業、先生方や同級生との交流の在り方に、一人ひとりが様々な葛藤を抱えていたと思います。1 年間のオンライン授業を終えた後も、コロナ禍の脅威は増すばかりで、2 年次以降は感染症の状況に合わせた学生生活の変化に戸惑うこともありました。

しかし、今改めて 4 年間で振り返ってみると、それらは辛く悔しい思い出ばかりではありません。

私自身、本学人文学会主催の学生文化奨励賞に向けて取り組んだ研究では、多角的な視野を学ぶことができました。先生方のお力添えによって運営している学科の研究会では、研究活動の成果を一つの冊子にまとめる作業を経験することができ、レポートや卒業論文に活かせる技を得られました。また、本年度夏に実施された学芸員課程の館務実習では、講義だけでは掴みづらい学芸員の業務の幅広さや実践的な技術を学ぶことができ、それらを活かせる場として、現在は実習先の博物館にて資料整理の業務に携わっています。4 年間の研究では、調査先の方々と数々の出会いがあり、その縁は現在も広がり続けています。もちろん、4 年間の学科の講義、そして学科の枠を飛び越えた学部の講義においても、多様な学びや出会いがあり、入学前には想像もしてなかった人との繋がりを得ることが叶いました。

こうした私にとっての幾つもの学びや出会いは、迷いが生じた時に自分自身を支える「枝折」であると考えています。「枝」を「折る」と書く「枝折」には、「通った道を覚えるために、草木の枝を折り曲げて目印として置く」という意味があります。勉学に勤しむ、部活やサークルに力を注ぐ、就職に向けて活動の幅を広げるなど、私たちはそれぞれの想いを抱えながら大学生活を過ごしてきましたが、コロナ禍という苦境のなか選んだ道で手にしたものは、各々の「枝折」になっているのではないのでしょうか。私は 4 月から本学大学院へ進学するため、これまでの学びが直接的に繋がる場面は多いですが、春から社会人となる卒業生にとっても、神奈川大学での多様な学びは、未来の私たちの選択を助ける術になるはずです。

いつか立ち止まり悩むこともあるでしょう。その時、感染症の影響を受けながらも試行錯誤を重ねてきた4年間の日々には、自分自身の財産となる「枝折」があり、未来の私たちの背中を押してくれると信じてよいと思います。

日本各地を訪ね歩いた民俗学者、宮本常一は、大学には通っていないものの、自身の様々な経験から大学で学ぶということを次のように語っています。

「私は大学にまなぶということは、よき師を得、よき友を持つ機会をつかむことだと思う。よき師、よき友はどこにでもおり、また機会があれば得られるものと思われるけれども、大学というところはほぼ目的をひとつにする人びとの集まって学ぶところであり、したがって相似た志を持つ同僚がそこにおり、またその目的の方向づけをし、実践の方法について指導してくれる。」

宮本常一が述べているように、学部学科は同じ関心や興味を抱く人々が集まる場です。卒業生の誰しもが、よき師やよき友に出会ってきたことと思います。そして、今日、素晴らしい門出を迎えられたのは、至る所でご助言をくださり、ゼミナールや卒業研究において道を示してくださった先生方のお力添えがあつてのことです。この場をお借りし、重ねて御礼申し上げます。

さらに、私たちの大学生活は、よき師やよき友だけに支えられたものではありません。感染症拡大に伴う大学生活に不安を感じていたのは、決して学生だけでなく、保護者の方々も同じであったと思います。そうした中、精神的にも、経済的にも私たちを支えてくださったことに、感謝いたします。

今日をもちまして神奈川大学での日々は終わりを迎え、私たちは大学の学びのその先へと一歩を踏み出します。これから無限に広がる可能性と果てしなく続いていく道に希望を馳せながら、皆様方のご健康と神奈川大学の一層の発展を願い、答辞とさせていただきます。

2024年3月22日

卒業生代表

国際日本学部 歴史民俗学科 八木つきの